

スピノザにおける「第三種の認識」

—神および人間精神の自己認識—

黒川 勲

【要旨】 スピノザ哲学において、人間の自由は至福としての神への知的愛によって獲得されるものである。そして、この神への知的愛は「第三種の認識」あるいは「直観知」と呼ばれる認識において実現する。本稿では、この第三種の認識の特徴として「起源性」、「個別性」および「直接性」を取り上げ、それらの意義の解明を試みる。そのために、『エチカ』の読解を通して、特にスピノザにおける精神の永遠性とコナトゥスの概念に注目して考察を行なう。

スピノザにおける第三種の認識は、神の自己認識であるとともに人間の自己認識を意味している。神および人間は第三種の認識において、個別的な自己自身を直接に、起源としての神から、神の能力あるいはその現象であるコナトゥスを認識しているのである。

【キーワード】 第三種の認識 直観知 精神の永遠性 コナトゥス

はじめに

「第三種の認識から生ずる神への知的愛は永遠である。(Amor Dei intellectualis, qui ex tertio cognitionis genere oritur, est aeternus.)」(E. 5.P.33)

スピノザ哲学の目的が自由であり、「神への知的愛 (amor Dei intellectualis)」において結実する人間の「至福 (beatitudo)」にあることはよく知られている。そして、その神への知的愛は、冒頭引用文に見るように、スピノザの認識種別では「第三種の認識」、あるいは「直観知」と呼ばれる認識から生じるものである。本稿の目的は、スピノザにおける第三種の認識の特徴に関わる問題を、特に「精神の永遠性」と「コナトゥス」の概念に注目することによって、解明することにある。

本稿の論述を開始するにあたって、まず第三種の認識が示される『エチカ』第二部の認識の種別を概観し、特に第二種の認識と第三種の認識を比較することによって、第三種の認識の特徴に関わる問題を抽出する。続いて、『エチカ』第五部の第三種の認識についての言表を精神との関係から考察し、最終的に第三種の認識の特徴に関わる問題を、スピノザの精神の永遠性およびコナトゥスの概念から考察することによって解決して行きたい。

I 第三種の認識の特徴と問題

まず第三種の認識が示される『エチカ』第二部の認識の種別を概観して行く。スピノザは『エチカ』第二部定理40注解2において、認識の種別をまずは四つに分けて論じている。四つの認識の種別は次のようにまとめられる¹⁾。

- (1) 不確かな経験による認識
- (2) 記号からの想起による認識
- (3) 共通概念からの認識
- (4) 直観知による認識

(1)は感覚によってそこなわれ、混乱した、すなわち「知性的な秩序 (ordo ad intellectum)」を欠いた認識であり、(2)は記号などの刺激により、連想的に思い起こされる「観念の連結 (concatenatio idearum)」にすぎない想起あるいは記憶である。およそ真の認識とは、あるものに固有な本質を必然性にしがって認識することであるから、知性によって規定されない(1)の認識は認識の成立において必然性を欠いた偶然的なものにすぎない。(2)の認識は対象に対して極めて間接的であり、ものの固有の本質に関する真の認識と言い難いことは明らかである。これら(1)と(2)の認識をスピノザは一括して、虚偽の唯一の原因としての「第一種の認識」あるいは「意見 (opinio)」、「想像力 (imaginatio)」と見なしている。(3)の認識は、真の観念の特質、すなわち「確実性 (certitudo)」という内的特徴²⁾を備えた「十全な観念 (idea adaequata)」と見なされる「共通概念 (notiones communes)」からの認識であり、スピノザは真の認識として、「第二種の認識」あるいは「理性 (ratio)」の認識と見なしている。(4)の認識が本稿で問題としている「第三種の認識」である。この認識は真の認識として、スピノザ自身によって「直観知 (scientia intuitiva)」と呼ばれる認識である。

このように、スピノザは認識の種別を最終的には三つに分け³⁾、真偽に関しては第一種の認識を偽の唯一の原因と考え、第二種の認識と第三種の認識を真の認識と見なし、二つに分けてとらえている。

「第一種の認識は虚偽の唯一の原因である。第二種および第三種の認識は必然的に真の認識である。(Cognitio primi generis unica est falsitatis causa, secundi autem, & tertii est necessario vera.)」(E. 2. P. 41)

それでは、ともに真の認識とされる第二種の認識と第三種の認識とは、どのように区別されるのであろうか。続いて、第二種の認識と第三種の認識を比較することによって、第三種の認識の特徴に関わる問題を見出して行きたい。

まず第二種の認識が真の認識とされる根拠は、「共通概念」の十全性から導き出されている⁴⁾。すべての物体は、たとえば「延長」や「運動と静止」におけるように、いくつかの点で「一致する (convenire)」(E. 2. post P13-L2) ものである。そのような部分においても全体においても共通なものは、「個物の本質 (rei singularis essentia)」を直接に構成しえないにしても (E. 2. P. 37)、まさにあらゆる物体の本性を貫く根源であり、それなしに物体についてのいかなる認識も持ちえない共通な基盤的概念である故に、十全なものと考えなければならない。換言すれば、共通概念はものの認識において、その認識成立のための可能性の条件とし

て、十全でなければならないのである。『神の属性の形相的本質の十全な観念から、ものの本質の十全な認識へと進む』(Atque hoc cognoscendi genus procedit ab adaequata idea essentiae formalis quorundam Dei attributorum ad adaequatam cognitionem essentiae rerum.)」(E. 2. P. 38)の十全を指すのは、この場合、*adequate* (完全)の意味である。このように共通概念は、認識における基盤的概念であり、「われわれの推論の基礎 (ratiocinii nostri fundamenta)」あるいは『公理 (axiomata)』¹⁾として、真なる理性的認識を構成するのである (E. 2. P. 40. S. 1)。

一方、第三種の認識は、次のような認識として説明されている。

「そしてこの種の認識は、神のいくつかの属性の形相的本質の十全な観念から、ものの本質の十全な認識へと進むものである。(Atque hoc cognoscendi genus procedit ab adaequata idea essentiae formalis quorundam Dei attributorum ad adaequatam cognitionem essentiae rerum.)」(E. 2. P. 40. S. 2)

スピノザにおいて、第三種の認識が真の認識とされる根拠は、その存在論から導き出される。スピノザにおいては、存在するすべてのものは、第一原因であり唯一の実体である神から、同一の必然性によって生じる神の様態である。ただ、同じ一つのもが思惟の属性によってとらえられるか、延長の属性によってとらえられるかにより、観念あるいは観念の対象(物体)として二様に考えられるのである。そうして見れば、観念と観念の対象は、それらの存在論的起源である神においては同一のものであり、完全に一致していると考えなければならない (E. 2. P. 32. Dem)。すなわち、「あらゆる観念は、神に関係させられるかぎり真なのである」(E. 2. P. 32)。ひるがえって、第三種の認識の基礎である「神の属性の形相的本質の観念」は、属性を神の属性として、それ自体でとらえた観念にほかならず、まさに「神に関係させられるかぎり」という真理の観点に一致し、十全なものと考えなければならない。そして、スピノザにおいて、十全な諸観念から生ずるあらゆる観念もまた同時に十全である (E. 2. P. 40) から、「神の属性の形相的本質の十全な観念からものの本質の十全な認識へと進む」第三種の認識は真の認識と考えられなければならないのである。

こうして見れば、第二種の認識と第三種の認識とはともに真の認識とされながらも、それらは幾つかの点において特徴的に相違している。第一に、それらの認識における真理性の根拠に相違が見て取れる。すなわち、第二種の認識は共通概念に見出される「共通性」を根拠とし、第三種の認識は「神の属性の形相的本質の観念」に見出される神からの「起源性」を根拠としている点である。第二に、第二種の認識と第三種の認識の対象の性格にも同様に相違が存在している。第二種の認識は共通概念による認識であり、ものに共通な本性について真の認識をなすに過ぎない。すなわち、共通なものは個物の本質を直接に構成しえないのであるから、第二種の認識は個物の本質そのものの認識とは言いえないのである。しかしながら、第三種の認識は先の言表に見るように「ものの本質の十全な認識 (adaequata cognitio essentiae rerum)」をなし、個物の本質である「特殊的本質 (essentia particularis)」を把握する、「個別性」を特徴とする認識と見なさなければならない。第三に、スピノザは第三種の認識を直観知と呼び、

その「直観的な (intuitivus)」認識の「直接性」を指摘している。すなわち、第二種の認識は共通概念を基盤とした推論的な理性認識として「段階性」を特徴とするが、第三種の認識は認識の「直接性」を特徴とするのである。このように、第三種の認識は認識の「起源性」、「個別性」および「直接性」を特徴としている。それでは、スピノザ哲学において、いかにしてこれらの特徴の意義を説明することができるのであろうか。この点を本稿における第三種の認識の特徴に関わる問題として解決を試みたい。

II 第三種の認識と精神

スピノザは第三種の認識について、『エチカ』第五部の神への知的愛を導出する諸定理において集中的に述べている。続いて、これらの諸定理を特に第三種の認識と精神との関係に注目することによって読解し、第三種の認識の意義についての考察を深めたい。

スピノザにおいて人間精神は、その存在論から神の実体の属性、すなわち思惟の属性の一樣態にはかならない。このことはスピノザにおいて、真の意味で認識の主體と呼びうる存在者は、は神のみであることを意味している。さらに、スピノザは人間精神を神の一樣態と見なす観点を徹底し、精神を「観念 (idea)」と等置して考え、その観念の対象を現実的存在である「身体 (corpus)」と見なしている。まさに、人間精神は自身の身体を対象とする「人間身体の観念あるいは認識そのもの (ipsa idea, sive cognitio Corporis humani)」(E. 2. P. 19. Dem)なのである。この精神にとって原初的な対象である身体の本質について、スピノザは次のように述べる。

「神はこのあるいはかの人間の身体が存在の原因であるばかりでなく、本質の原因でもある。それ故、その身体の本質は神の本質そのものによって考えられなければならない。(Deus non tantum est causa hujus, & illius Corporis humani existentiae, sed etiam, quae propterea per ipsam Dei essentiam necessario debet concipi)」(E. 5. P. 22. Dem)

すなわち、神はすべての第一原因である故に、身体が存在のみならず、本質の原因でもある。そして、その身体の本質は神の本質から考えられなければならない。そうして見れば、神の本質から考えられた「身体の本質の観念」、換言すれば「身体の本質を対象とする精神」が存在することになる。しかし、このように神の本質からとらえられた精神は、持続的なものでありえず、永遠なものと考えられなければならない。なぜなら、神の本質は永遠であり、その永遠な神の本質から必然的に導き出されたものは、永遠なものと見なさなければならないからである。確かに、スピノザにおいて現実的存在である身体を対象とする精神は現実的存在が持続する限りにおいて存在しうるものであるが、一方で身体の本質を対象とする精神という観点からすれば永遠性をもちうるものである。

「身体の本質を永遠の相のものとして表現する観念は、精神の本質に属し、必然的に永遠な、ある一定の思惟の様態である。(Est, uti diximus, haec idea, quae Corporis essentiam sub specie aeternitatis exprimit, certus cogitandi modus, qui ad Mentis essentiam

pertinet; quique necessario aeternus est.)」(E. 5. P. 23. S)

そして、このように永遠性をもちうる精神の最高の努力、あるいは幸福へと向かう力である最高の徳は、スピノザによって第三種の認識とされるのである。

「精神の最高の努力、最高の徳は、ものを第三種の認識によって認識することにある。
(Summus Mentis conatus, summaque virtus est res intelligere tertio cognitionis genere.)」(E. 5. P. 25)

なぜなら、精神活動の本性は認識することであり、スピノザにおいて精神が認識しうる最高の対象はすべてのものの根源である神である (E. 4. P. 28. Dem)。一方、第三種の認識は、「神の属性の形相的本質の十全な観念からものの本質の十全な認識へと進む」認識であり、その個物の本質の十全な認識において、必然的に神の認識をともなうものである。そうして見れば同時に、この第三種の認識によって、個物をより多く認識することは、神をより多く認識することにつながることになる (E. 5. P. 24)。それ故に、精神の最高の努力と徳が第三種の認識と見なされるのである。

しかしながら、第三種の認識を最高の努力と徳とする精神は、先に見たように永遠性をもつ精神でなければならない。なぜなら、第三種の認識は「神の属性の形相的本質の十全な観念からものの本質の十全な認識へと進む」認識として、神の永遠の本性の必然性から個物の本質を認識する「永遠の相のものと (sub aeternitatis specie)」の認識であり、決して「持続の相のもとで」は生じえない。すなわち、精神が「永遠の相のものと」認識するかぎり、その認識活動の様相において永遠性をもつもの、先の表現では「身体の本質を対象とする精神」でなければならないからである。

「永遠の相のもとで認識されるすべてのものは、精神が身体の現在の現実的存在を考えることによってではなく、身体の本質を永遠の相のもとで考えることによって認識される。
(Quicquid Mens sub specie aeternitatis intelligit, id ex eo non intelligit, quod Corporis praesentem actualem existentiam concipit, sed ex eo, quod Corporis essentiam concipit sub specie aeternitatis.)」(E. 5. P. 29)

こうした第三種の認識が、永遠であるかぎりの精神によってのみなしうるものであることは、再び『エチカ』第五部定理31証明において、簡潔にまとめられている。ものを永遠の相のもとで考えることは、神の永遠の本性の必然性から個物の本質を認識することにほかならない。この認識の構造は、「神の属性の形相的本質の十全な観念からものの本質の十全な認識へと進む」第三種の認識に合致している。すなわち、永遠の相のもとでの認識は第三種の認識と同一である。一方、永遠の相のもとでの認識は、身体の本質を対象とする永遠であるかぎりの精神でなければなしえない。それ故、第三種の認識は永遠であるかぎりの精神によってのみなしうる認識なのである。

「第三種の認識は、永遠であるかぎりの精神を形相因とし、永遠であるかぎりの精神に基

づく。(Tertium cognitionis genus pendet a Mente, tanquam a formali causa, quatenus Mens ipsa aeterna est.)」(E. 5. P. 31)

これまで、第三種の認識を精神との関係に注目することによって考察してきた。第三種の認識は、身体の観念である精神が行うものであるが、その身体の観念とは「身体の本質の観念」であり、それはスピノザにおいて「永遠であるかぎりの精神」である。この知見を手がかりとし、スピノザの精神の永遠性およびコナトゥスの概念から考察することによって、さらに論述を進めたい。

Ⅲ 永遠およびコナトゥスと第三種の認識

1 永遠と精神

まず、スピノザにおいて第三種の認識を担う「永遠であるかぎりの精神」の存在論的位置づけはどのようなものであろうか。スピノザは永遠について次のように説明している。

「永遠とは存在そのもののことであると解する。だが、この場合の存在とは永遠なものの定義のみから必然的に生じてくると考えられる存在のことである。(Per aeternitatem intelligo ipsam existentiam, quatenus ex sola rei aeternae definitione necessario sequi concipitur.)」(E. 1. D. 8)

永遠とは定義あるいは本質から必然的に導出される存在自体を指し示すものである。スピノザ存在論において、永遠に相応しいものとは、第一に神である。神は「自己原因 (causa sui)」として、その本質に存在を含んでいる (E. 1. D. 1)。それ故に、神は必然的に存在するものである (E. 1. P. 11)。あるいは、神の存在と本質は同一である (E. 1. P. 20)。このように本質的に存在する神は永遠の定義に従って、永遠なものとならなければならない。

「神あるいは神のすべての属性は永遠である。(Deus, sive omnia Dei attributa sunt aeterna.)」(E. 1. P. 19)

続いて、第一義的に永遠な神のある属性の絶対的本性から生じるものも、また永遠かつ無限なものを見なされる。なぜなら、無限な思惟の属性から絶対的に生じたものが有限であると仮定するならば、その有限なものは他の思惟の属性によって限定されなければならない。このことは、唯一の神あるいは唯一の同種の属性の存在に (E. 1. P. 14. C. 1)、矛盾することになるからである。

「神のある属性の絶対的本性から生じるものはすべて、常に無限なものとして存在しなければならない。あるいはその属性によって永遠かつ無限である。(Omnia, quae ex absoluta natura alicujus attributi Dei sequuntur, semper, & infinita existere debuerunt, sive per idem attributum aeterna, & infinita sunt.)」(E. 1. P. 21)

そして、スピノザはこの永遠な神の思惟の属性の絶対的本性から生じるものを、「無限知性 (intellectus infinitus)」あるいは「神の観念 (idea Dei)」と見なしている⁶⁾。これら二つのものは同一の事態を示すものであるが、同一事態をとらえる力点の置き方によって異なる表現をもっていると考えられる。すなわち、神のもつ認識主体としての側面を強調するとき「無限知性」ととらえられ、認識内容の側面を強調するとき「神の観念」ととらえられるのである。それでは、これらの異なる表現をもつ同一事態を統合的に示すならばどのようなようになるであろうか。神は認識主体として無限知性によって認識する。そして、無限知性によって認識された認識内容とは神の観念である。認識内容が神の観念とされるのは、神が神自身を認識していることにほかならない。すなわち、この無限知性と神の観念は、「神の自己認識」という同一事態を異なる表現で示しているのである。

そして、スピノザの存在論において、この「神の自己認識」を意味する無限知性の一部分が人間の精神とされるのである。

「この帰結として、人間精神は神の無限知性の一部ということになる。したがって、人間精神がこのあるいはかのものを知覚するというとき、それは無限であるかぎりの神ではなく、人間精神の本性によって説明されるかぎりの神、あるいは人間精神を構成するかぎりの神が、このあるいはかの観念をもっていると言うことにほかならない。(Hinc sequitur Mentem humanam partem esse infiniti intellectus Dei; ac proinde cum dicimus, Mentem humanam hoc, vel illud percipere, nihil aliud dicimus, quam quod Deus, non quatenus infinitus est, sed quatenus per naturam humanae Mentis explicatur, sive quatenus humanae Mentis essentiam constituit, hanc, vel illam habet ideam)」
(E. 2. P. 11. C)

この言表に見られるように、人間の精神は「神の無限知性的一部分 (pars infiniti intellectus Dei)」であり、人間精神が認識するというとき、それはあたかも人間精神が認識主体であるかのようにとらえられるが、本来的には人間精神を構成するかぎりの神が認識しているであり、スピノザにおいて、真の意味で認識の主体と呼びうるのは神のみであることに合致している。いずれにせよ、人間精神が神の無限知性の一部であることは、同時に人間精神が「神の自己認識の一部」を意味することにほかならない。このようにして見れば、第三種の認識を担う「永遠であるかぎりの精神」は、永遠な神の思惟の属性の絶対的本性から生じる「神の自己認識の一部」ととらえなければならない。

2 コナトゥスと精神

一方、第三種の認識を担う「永遠であるかぎりの精神」は、先に見たように「身体の本質の観念」であり、このことが「精神の本質」である。すなわち、人間存在という同一のものが、延長の属性によってとらえられるか、思惟の属性によってとらえられるかにより、身体あるいは精神として異なる表現で示されるのである。それでは、現在人間存在の本質に関わって異なる表現をもつ、本来同一のものを統合的に表現すしよとすならば、どのような概念がスピノザにおいて摘出されうるであろうか。その概念として、「コナトゥス・自己保存力 (conatus)」の概念が存在すると考えられる。

スピノザにおいて、コナトゥスは人間の「与えられた現実的本質 (data, sive actualis essentia)」(E. 3.P. 7. Dem.) である。コナトゥスは人間の現実的本質として、「それが与えられれば、そのものが必然的に定立され、除去されれば、そのものが必然的に消滅するようなもの」(E. 2.D. 2) であり、存在の純粋な肯定を意味している。コナトゥスが存在を肯定するものの本質を意味するならば、ものを壊滅させるものはもの自体の内部には存在しえない。すなわち、いかなるものも外的原因によらなければ壊滅されない (E. 3.P. 4)。このことは同時に、もの自体の内部における対立的本性の否定を意味している (E. 3.P. 5)。コナトゥスとは、もの自体の内的同一性を維持し、その存在を純粋に肯定して、対立的な外的原因に抵抗する自己保存力なのである⁷⁾。

「各々のものが自己の存在に固執しようとするコナトゥスは、そのもの自身の現実的本質にはかならない。(Conatus, quo unaquaeque res in suo esse perseverare conatur, nihil est praeter ipsius rei actualem essentiam.)」(E. 3.P. 7)

スピノザにおいて、コナトゥスはもの自体の現実的本質として⁸⁾、もの自体の内的同一性を維持し、その存在を純粋に肯定する人間存在の全体を包括する概念である。換言すれば、このコナトゥスが人間の延長の側面で表現されるとき「身体の本質」と言われ、思惟の側面で表現されるとき「身体の本質の観念」あるいは「精神の本質」といわれるのである。

そして、この人間存在の全体を統合する概念であるコナトゥスもまた、スピノザの存在論においては神によって基礎づけられる。コナトゥスが人間の現実的本質とされるならばその本質の原因は神である。

「神はものの存在のみでなく、その本質の起成原因でもある (Deus non tantum est causa efficiens rerum existentiae, sed etiam essentiae.)」(E. 1.P. 25)

そして、「神の能力は神の本質そのもの」(E.1.P.34) なのであるから、神は本質として「力能 (potestas)」をもち、個々のものは神の実体の様態として神の能力を一定の仕方で表現していると考えられる。

「ところで個物は様態であって、神の属性を一定の仕方で表現している。言い換えれば、神が存在し活動する能力を一定の限定された仕方で表現する。(Res enim singulares modi sunt, quibus Dei attributa certo, & determinato modo exprimuntur, hoc est res, quae Dei potentiam, qua Deus est, & agit, certo, & determinato modo exprimunt)」(E. 3.P. 6. Dem.)

こうして見れば、コナトゥスとは、人間存在において限定してとらえられた神の能力にはかならない。ひるがえって、人間精神についていえば、人間の精神とは、神の能力の一部であるコナトゥスが、思惟の属性において現象したものにかならないのである。

これまで第三種の認識を担う「永遠であるかぎりの精神」を、永遠性とコナトゥスの概念か

ら考察してきた。まず、「永遠であるかぎりの精神」は、永遠な神の思惟の属性の絶対的本性から生じる「神の自己認識の一部」ととらえなければならない。そして、その人間の精神とは、神の能力の一部であるコナトゥスが、思惟の属性において現象したものにほかならない。そうして見れば、スピノザにおいて人間精神とは、神の自己認識の一場面において、神が活動する能力の部分的現象と考えられる。このように理解するならば、さらに神の自己認識について、新たに認識の具体的内容を指摘することができる。人間精神における神の自己認識は神の活動を意味しているのであるから、神は自己認識において、神自身の能力あるいはその活動を認識しているのである。

結語

本稿において、第三種の認識の特徴に関わる問題として、その「起源性」、「個別性」および「直接性」を指摘し、スピノザ哲学における、これらの特徴の意義の解明を取り上げた。これまでの考察に基づいて述べるならば、第三種の認識は人間の「永遠であるかぎりの精神」が行なうものであるが、その精神とは神の自己認識の一場面において、神が活動する能力の部分的現象であると考えられる。あるいは、神の自己認識活動自体の人間精神において限定された認識そのものである。このように、第三種の認識を神の自己認識と神の能力の認識としてとらえるならば、「起源性」、「個別性」および「直接性」の各特徴の意義は、それ自体として明らかである。神は神自身によって神自身を認識しているのであるから、まさに起源として神自身に基いている。そして、神は唯一の実体なのであるから、自己認識に他の実体と共有する内容は侵入しえない。それ故に、個別的な神の本質を認識しているのである。さらに、自己認識は無媒介性を特徴とするのであるから、決して段階的な認識ではなく直接的な認識としなければならないのである。このようにして見れば、第三種の認識の特徴の意義について、一定の理解を得ることができる。

しかしながら、第三種の認識は『エチカ』第二部あるいは第五部において、まずは人間の認識、人間精神を認識主体と見なす認識の種別においてとらえられているのであるから、前述の理解を踏まえた上で、人間の立場からの理解をも示す必要がある。人間精神は「身体の観念」として規定されるが、「身体の本質」、すなわち本質に注目してとらえられるとき、「身体の本質の観念」として立ち現れる場合がある。そして、「身体の本質の観念」こそが「精神の本質」なのであり、「永遠であるかぎりの精神」である。そして、これら身体の本質あるいは精神の本質は、人間の延長あるいは思惟の側面での本質なのであるが、本来同一のものであり、人間存在全体の統合的本質としては、人間存在の内的同一性を維持し、その存在を純粹に肯定するコナトゥスと考えることができる。このようにして見れば、反対に、人間存在の全体の統合的本質であるコナトゥスが、人間の延長あるいは思惟の側面で活動していると見なすことができる。そして、特に思惟における活動とは「身体の本質」を対象とする認識活動であり、それは再び身心双方において同一のコナトゥスを認識することにほかならない。すなわち、第三種の認識にみられる人間精神は、人間存在全体の統合的本質であるコナトゥスを認識している、あるいはその認識活動自体の認識そのものとして理解しうる。第三種の認識は人間の自己認識を意味しているのである。人間精神は第三種の認識において自己認識を行なっている。その自己認識において、人間精神は人間自身のコナトゥスあるいはその活動を認識しているのである。

そして、第三種の認識を人間精神の自己認識と人間自身のコナトゥスの認識としてとらえるならば、第三種の認識の「起源性」、「個別性」および「直接性」の各特徴の意義は、次のようにまとめることができる。人間精神は第三種の認識において、自己自身という個別的存在者を、自己認識の直接性によって、起源である神の能力とその現象であるコナトゥスの同一性において認識しているのである。

註

『エチカ』からの主な引用文には、その末尾に引用箇所を略号で示す。『エチカ』第二部定理13の補助定理3の後にある公理は、E. 2. post P. 13-L. 3. A. 2である。また、D. は定義、Dem. は証明、C. は系、S. は注解を指す。また、本稿の論述において重要と見られる定理等については、引用文に原文を付す。原典は次の通りである。Spinoza : *Ethica, Opera Bd. II, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, Carl Winter, 1972.*

1) スピノザは『知性改善論』においても認識の種別をおこなっている。スピノザは知覚様式を次の四種に区別する。

- (1) 聞き覚え、慣習的記号からの知覚
- (2) 漠然とした経験からの知覚
- (3) その本質が他のものから結論される知覚
- (4) その本質のみによって、あるいはその最近原因によって結論される知覚

およそ真の認識とは、あるものに固有な本質を認識することであるから、第一の知覚は対象に対して極めて間接的であり、それ故不確実であることは明らかである。第二の知覚は知性によって規定されておらず、その知覚は偶然的な出来事にすぎない。換言すれば、第二の知覚はものの本質ではなく偶有性の他に何ももの知ることはできない。しかも、その偶有性の知覚は、その偶有性の本質への必然的帰属が認識されていないならば、つまりその本質が認識されていないならば、真であることはできない認識である。第三の知覚はいわば帰納、あるいは演繹という論理的推論による知覚であるが、帰納によっては結果において認識されたもの以外、原因について認識することはできない。それは原因の本質を何も認識することなく、原因の特性の認識にとどまるのである。一方、何らかの特性をとともなう普遍的概念から結論する演繹は、誤謬の危険なしに結論下しうると言える。しかし、それもまた「普遍的なもの (aliquis universalis)」の分析によるものの特性の認識にとどまり、そのものに固有の本質、あるいは「特殊的本質 (essentia particularis)」を認識していることにはならない。すなわち、ものの真の認識とは呼びえない。最終的に、スピノザは『知性改善論』において、その本質のみによって、あるいはその最近原因によって、直接的かつ必然的に結論される第四の知覚を最上の知覚様式として選択することになるのである。Spinoza : *Tractatus de intellectus emendatione, Opera Bd. II, pp.10-13.*

2) スピノザにおいて、真理は対象との関係で考えられた、すなわち観念と対象との一致を指標とする「外的特徴」と真の観念自体の特徴を指標とする「内的特徴」によって区別される (E. 1. D. 4)。そして、内的特徴を有する真の観念は同時に「十全な観念」と見なされる。また、この内的特徴に当たるものは『知性改善論』では「確実性」と表現されている。Spinoza : *Tractatus de intellectus emendatione, Opera Bd. II, p.15.*

3) 『エチカ』における三つの認識の種別を簡潔にまとめると次のようになる。

- (1) 第一種の認識 「不確かな経験及び記号からの想像力による認識」
- (2) 第二種の認識 「共通概念からの推論による理性的認識」
- (3) 第三種の認識 「神の属性の本質からものの本質を把握する直観的認識」

また、スピノザはこれら三つの認識の種別を比例数の例によって説明している (E. 2. P. 40, S. 2)。 $a:b=c:d$ の関係が成り立ち、 d のみが不明な際、人が d を求める方法は bc/a である。この方法を何の証明もなしに聞き覚えて記憶している場合および簡単な数において経験したために見いだした場合が、(1)第一種の認識である。この方法はユークリッド第7巻定理19に示されているが、その証明を理解し、すなわち比例数の「共通の (communis)」特質に基づいてとらえている場合が、(2)第二種の認識である。しかし、簡単な数の場合、この方法を用いる必要はない。人は「一瞥で (uno intuitu)」、あるいは直観的に d を見いだすことができる。それが、(3)第三種の認識となる。

4) スピノザの共通概念については、ドゥルーズによる先進的な研究がある。ドゥルーズは共通概念の重要性を、①スピノザ哲学における理性概念の変革、②人間のもつ十全な認識の基礎づけ、③虚構ではなく実在そのものの数学の形成、④全自然の構成上の統一と一なる自然の多様な変化の様態を理解せしめる自然の幾何学の形成、と指摘している。Deleuze: Spinoza; practical Philosophy, Translated by Robert Hurley, City Lights Books, 1988, pp.54-58.

5) 河井氏は理性認識の『知性改善論』から『エチカ』への位置づけの変化を、帰納推理による経験法則の一般化から共通概念の確立に見ている。むしろ、共通概念の確立によって経験法則の根拠が鮮明に示されることになるのである。河井徳治、『スピノザ哲学論攷』、第1部第5章第4節、p.137.

6) スピノザにおいて、神の属性の絶対的本性から生じるものは「直接無限様態」と考えられ (E. 1. P. 21)、直接無限様態を「媒介して」生じるものは「間接無限様態」と考えられている (E. 1. P. 22)。

直接無限様態と間接無限様態が、それぞれ何を意味しているかについては幾つかの議論がある。例えばロビンソンは延長の属性に関しては、直接無限様態を「運動と静止」とし、間接無限様態を「全宇宙の相」としている。また、思惟の属性に関しては、直接無限様態を「神の観念あるいは神の本質の観念」とし、間接無限様態を「神の本質から必然的に生起するすべてのものの観念」として、同時に両無限様態を「無限知性」と見なしている。Lewis Robinson: Kommentar zu Spinozas Ethik, Felix Meiner, 1928, p.311.

スピノザは書簡64において、シェーラーの「神から直接に産出されるものと無限な様態的変様を媒介して産出されるものの例」の問いに答えて、直接無限様態を思惟においては「絶対無限知性 (intellectus absolute infinitus)」、延長においては「運動と静止 (motus et quies)」としている。また、間接無限様態を「全宇宙の相」としている。Spinoza: Epistolae, Opera Bd.IV, Epistola No.64, p.278.

また、直接無限様態と間接無限様態の延長の属性における分析を、筆者は拙稿「スピノザにおける最単純物体と複合物体について」、『シンポジオン』、第47号2分冊、広島大学哲学研究室、2002.において行なっている。

7) コナトゥスの導出に関する『エチカ』の諸定理のまとめを、筆者は拙稿「スピノザにおけるコナトゥスの現実性」、大分大学大学院福祉社会科学研究所紀要、第7号、2007、pp.31-34.において行なっている。

8) コナトゥスはものの現実的本質と言われるが、スピノザにおいて、その現実性は二様に解釈され

る。それらは、「経験的現実性」と「知性的現実性」と特徴づけられる。人間は経験的・身体的世界においては想像力によって、物体を現実的事物として、そしてその本質的力を現実的なものとして把握せざるをえない。このことはコナトゥスの経験的現実性に相応することになる。しかし同時に、その本質的な力の起源と本性を存在論的に、知性によって認識しようとするならば、コナトゥスは神の力能の表現として必然的であり、それ故現実的に把握されることになる。すなわち、コナトゥスは知性的現実性を示すのである。こうして見れば、現実的本質と語られるコナトゥスは「想像力—知性」の各々において二様の現実性を示しながらも、「一つのもの」と考えなければならない。換言すれば、「一つのもの」であるコナトゥスが、「想像力—知性」の各々の認識能力において、それぞれの現実性を示すと考えることができるのである。上記、拙稿「スピノザにおけるコナトゥスの現実性」, p.39.

付記：本稿は平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。

The third kind of knowledge in Spinoza's Philosophy

—Self-knowledge of God and human mind—

KUROKAWA Isao

Abstract

In this paper I tried to understand Spinoza's concept of the third kind of knowledge. For this purpose I regarded the investigation into signification of three properties of the third kind of knowledge, and they are immediateness, individuality and ground of the truth. In order to solve this problem, I would consider propositions concerning the third kind of knowledge in his *Ethica*. And I would examine Spinoza's thoughts of conatus and the eternity of the mind. In Spinoza's philosophy, the third kind of knowledge signifies self-knowledge of God and human mind. Through their self-knowledge, each of God and human mind recognizes immediately individual themselves in the identical potency of God.

【Key Words】 the third kind of knowledge, intuition, the eternity of the mind, conatus